

郷里を離れて50年 （そして今思うこと）

伊原江太郎（高18回）

賑わった飯田の街

私の生まれた飯田は伊那谷最大の商業都市として繁栄し、その賑わいぶりは今なお鮮明に覚えている。街路には宣伝カーが、またチンドン屋が行き交う中で当時のヒットソングも流れる等、隆盛感の溢れる山都であった。当時の光景を申すと、総合家電メーカーの旗艦販売店等々、地方都市とは思えない洒落た店が散見される時代であった。飯田のみならず地方都市の往年の経済力は大きく、戦後の所得番付を見ると暫くの間、各地の山林業者が上位を独占しており、飯田近隣の山持ち等は「倅を東京の私立大学に出すのに檜を3本売ればお釣りがくる」と豪語するほど、山林経営を有する地方は、当時の大都市の生活レベルと比較して遜色のないものであった。ところが時代は変わり、東京オリビックが開催され

家業の継承を断念した私が歩むべき道は何かと探しあぐねた末に辿り着いた結論は、国家公務員として身を立てることだった。翻って見るに、これまでさして勉学等真剣に打ち込むものもなく、大学進学後は母の実家のある池袋の家の離れの部屋に3食付きの居候をし、安易な暮らしに浸る自身であった。その殻を破る契機となったのは高校時代の親友で同級生のM君である。私は彼の寄宿する学生寮を訪ね、その独特な雰囲気や憧れて、同宿を懇願することにした。

その学生寮「信陽舎」の元を辿れば、私の祖父、当家9代目・伊原五郎兵衛（伊那電Ⅱ現JR飯田線創設者）をはじめ篤志家が集まり、飯伊地区の東京遊学生のため明治39年に創設されたものだ。その顛末を知る私は、無理を承知の上で強引に舎監から入寮許可を貰い受けたのである。それは一人っ子で我儘に育てられた自分を鍛え直すための、自らの選択でもあった。

当時の信陽舎は県下各地より44名の男子学生が寄宿する多種多様な大学生の集合体であり、自堕落な学生もいるかと思えば、大人顔負けの如き良識をわきまえた学生もいる等、その有り様を目の当たりにすること自体、何にも勝る貴重な社会勉強となった。4年生の春、国家公務員試験に無事合格し、我が学生生活にも終止符を打つ



●いはら・こうたろう
飯田市銀座生まれ。立教大学経済学部卒。昭和45年参議院事務局入り。主に国政調査部門を歩み、平成15年国土交通委員会専門員就任。20年退官。瑞宝中綬章受章。現在、公益財団法人・信陽舎副理事長。

た昭和30年代後半に入ると、我が国の産業は急激な構造転換に直面することになった。大都市圏は人口集中に伴い集合住宅が林立、それまで主流とされた戸建て住宅の部材である木材の需要は急減。加えて暮らしに欠かせない燃料も炭や薪からガスや石油へと転換を余儀なくされる流れの中で、飯伊をはじめとする地方の地場産業はこれら物資の供給基地としての地位を失い、街も衰退の一途を辿った。

江戸時代・元文4年の創業以来、飯田銀座で工芸色強い漆器商「近江屋」を営んできた我が家ではあったが、こうした動きの中で、当家1代目を継ぐ筈であった私は悩んだ末に暖簾を下ろすことにした。それは昭和45年のことで、無論、断腸の思いであった。

わが師の信陽舎

ことになった。

実にお世話になった信陽舎だが、とりわけ、入ったばかりの頃に親身になって忠告や叱咤激励を下さった4年生の先輩に対する思慕の念は、半年という



国家公務員を目指して猛勉強。信陽舎にて

極めて短い期間の付き合いだったとはいえ、生涯消えることはない。そのうちの1人は某電力会社の初代原子力発電所の所長を務められ、もう1人の先輩は、損保会社の役員を経て現在、信陽舎の役員になられるなど、共に公益奉仕の道を歩まれている。

業務に恋した人生

社会人となった私は、参議院事務局に入り、建設委員会調査室を皮切りに、約40年近くにわたり、多くを国政調査に関わる部門で過ごすこととなった。その間、上司との感情の纏れから2度の職場転換を経験した中で、管理部副部長時代に天皇陛下下の国会開会式に臨まれる際に安息される「御休所」の改修を仰せつかり、絶対に間違いない対応に徹するよう全神経を研ぎ澄まし無事に完工したことは記憶に新しい。

そのことは直接関係はないが、昭和天皇妃の香淳皇后の死去に際しては、秋篠宮殿下御夫妻と共に「殯柩の間」(天皇・皇族の棺を葬儀の時まで安置しておく仮の部屋)にて臨席する機会を与えられた。皇族の方々が日々の公務を果たされる場に初めて足を踏み入れ、その雰囲気には圧倒されたことは今も記憶に鮮明である。

そして平成15年、第156回国会での承認人事を経て国土交通委員会専門員に任命され、通期2期6年の任期を終え、平成20年、第169回国会をもって退官した。その間、小泉・福田の各内閣時代に観艦式や観桜会の招待(当時は問題なし)を、また退官直後、平成20年の秋の園遊会に招待を賜り、今は亡き妻洋子(旧姓・平岩、高20回)と揃って東宮御所にて歓待を受けたことは感慨



天皇皇后両陛下主催の園遊会に妻洋子と出席(平成20年秋)

深い出来事となった。

また、昨年の令和元年春の叙勲において、参議院より瑞宝中綬章の授与通知を受け、71歳の老身に礼服をまとい、皇居にて今上天皇への拝謁の荣誉に浴したことは、今生の忘れ難き出来事となった。

の盟主及び世界標準の獲得という二面作戦に軸足を切り替え始めていたのである。一方、我が国が導き出した結論は、米国の思惑通り、自動車等主要産業の輸出温存策の優先という形での選択であった。

時は流れ、20年余り経過した今日、日本企業を尻目に急成長・巨大化したビッグテック「GAFAM」に象徴される米国の情報通信産業の群生、そして中国のみならずバルト三国のエストニア等多くの国々における「デジタルシフト・新常态」の急展開を目の当たりにする時、時流を見通す我が国の眼力と決断力が再問されている。

もう一つは、「大都市圏への人・モノ・富の集中、偏在」言い換えるなら「地方圏の衰退・消滅」であり、その是正策の一つとして地方分権法案が提案され、その審議に携わった時に苦悩したことである。

我が国の高度成長末期あたりから、やがて招来する大都市の過密・地方の過疎がもたらす弊害の深刻さが指摘され始めていた。この解決の手掛かりとしては、古くからある「地域産業連関」に依る地域間相互の経済取引の収支結果の全貌把握を通じて衰退地域がやがて直面する疲弊にも言及されたが、それを当時は現実視できず、均衡ある地域発展への好機を見失った。

そして、激しさを増す一方の東京一極集中が及ぼす全

不都合な真実〜若き人へ

最後に、我が国が抱える負の遺産について、自戒を込めつつ少しだけ触れておきたい。

一つは平成の初期に我が国の輸出超過による黒字が極大化し、その解消を求める日米経済構造改革の外圧が高まる中、米国内の本音は何か、その収集に携わった際に痛感したことである。

日米両国におけるその課題解決策としては、直接要因である日本製自動車等膨大な輸出商品の数量規制や現地生産拡充の一方、米国が国際競争力を有する農産物や武器等の対日輸出拡大等が大々的に報道されていたが、しかし米国内は全く別の案も検討していたのである。

当時、既に世界情報ハイウェイ構想の推進が俎上であり、その下で普及に欠かせないモノが情報端末のパソコンとされていた。米国内はそれを起動させるために組み入れる基本ソフトの開発競争において先行していた感のある日の丸連合の「トロン・プロジェクト」案を退け、M社製の米国内産ソフト搭載に必ずするという日本包囲網計画を準備していた。

つまり、米国はかつての自動車王国としての圧倒的地位よりも、次世代の主要産業と目される情報・通信産業国各地域への歪みの重大さに漸く衆目も一致するに至り、まずは地方分権法案の提出等に腰を上げはしたが、地方への移譲は行政権限に限定され、肝心要の経済活動における地方分散が伴わず、再び禍根を重ねる大失敗となった。その結果、今日、地方圏の行き着く先が限界集落化という厳しい現実の下では、地方創生の掛け声も虚しく、万策尽きている観がある。

以上、我々が積み残した負の遺産の一端に触れたが、今日の我が国が有する対応能力を踏まえると、一朝一夕に片付くような代物ではない。目を転じれば、世を震撼させている新型コロナウイルス等の治癒困難な災禍が頻発・長期化する恐れ、また最も懸念される巨大地震の発生とその後の行方、一向に先の見通せない少子高齢化等々の懸案解決に向けての姿勢・談話等は随時喧伝される。が、主要国中最も低い租税負担率下にあつて、加えて既に他に例を見ない巨額の国・地方の債務残高状況や日銀による超金融緩和等々の困難極まる後始末が後に控えている限り、不安と恐怖を覚える。

逃れることのできない我が国が抱える多くの「不都合な真実」の全貌について国民への明快・詳細な告知もないうままに、今後、若人と老いた我々ほどのようにして確たる将来像を描くのであろうか。